



ステージ発表する「小さな風」の皆さん  
(フェスタかだって)

希望学プロジェクト特別寄稿

# 新しい風はどこから…？



## 第11回 土田とも子さん

### Profile つちだ・ともこ

1946年神奈川県生まれ。東京大学社会科学研究所助教。  
国際協力学専攻。「女性の現状と政策にみる地域の希望」  
(『社会科学研究』59巻3・4号) など



橋野どんぐり広場の皆さん



郷土料理研究会の皆さん



釜石湾漁協白浜浦女性部の皆さん

## 地

地域調査で最も大切なことは、対象となる地域の方々の信頼を得ることである。その意味で、「最初の企画説明の際、この人たちの調査なら、最初に一生懸命調査協力と支援をしよう、と思った」という市役所担当者の方の言葉を聞いたとき、調査が順調にすべりだしたことを実感した。私の分担当は釜石の女性をめぐる状況についてである。調査が進み、メンバーが得られた情報を共有するにつれて、釜石の問題の難しさ、女性の置かれている状況の複雑さと、それに取り組む人々の粘り強い姿勢とが見えてきた。

釜石の抱える問題は、質量ともに不安定な雇用、進学や就職のための若者の流出、全国平均を大きく上回って進む高齢化と介護問題など、どれをとっても容易ではない。「鉄と魚のまち」という歴史を背負い、男性社会であった影響が色濃く残る釜石では、女性が声を上げる習慣も、それを意思決定の場に反映させるシステムも、まだ未成熟である。そのなかで介護の問題や非正規雇用の問題などが女性に集中しがちである。高齢者施設の数は足りず、しかし施設を増やすと介護保険料が上がるため、簡単に増やすことはできない。企業誘致では、安くて柔軟な女性パート労働が確保しやすいことが、条件の一つになっている。問題は簡単には解消できない。

だがそこには活発に活動している女性たちがいる。「釜石にはあれもない、これもない、と言っていないで、自分たちで良いところを探そう」ということで始まった若い世代中心の「小さな風」の活動は、釜石の新しい力として古くから活動してきた女性たちにも評価されている。「漁業は男女区別なく一緒に働くもの。漁協の意思決定に女性が入ることができれば今までになかった視点から漁業が改善できるだろう」という漁協女性部の意欲は特筆に値する。産直活動を支えるのも、組合長の努力とともに野菜作りの高い技術を持った女性たちに負うところが大きい。今後の地域社会構築に期待がかけられている生活応援センターの取り組みも、きめ細かい女性の目と手が欠かせない。声高に男女共同参画を言うわけでなくても、こうした活動の中から女性の力は少しずつ認められるようになってきている。海側と山側の女性たちが協力して実施している「郷土料理研究会」では、はじめ反対していた家族からも徐々に認められ、ある時夫が活動の場所をだまって掃除してくれていた、などのエピソードも聞かれた。

それでもまだ釜石では女性の力は十分には掘り起こされていない。これまでになかった斬新な発想や元気の出るアイデアが、出口を求めつつ埋もれているとしたらもったいない。

世界的な景気の後退は釜石にも波及しているが、困難なときほど新しい方策を実行するチャンスかもしれない。釜石の抱える困難を多角的なアプローチで改善していくために、男性も、女性自身も、女性の力を信じて対等にその能力を生かす仕組みを考えるべきときに来ている。

## 釜

釜石の女性たち、市民の方々に会ってお話すると不思議と明るい気持ちになる。筆者だけではない。調査メンバーの少ない数の人々が言うことである。釜石が抱える問題は、前述のようにどれも一筋縄ではいかない難しさがある。その背後には一地域では解決できない国の制度の問題や、グローバルな市場競争の問題も横たわる。難問である。だから、「不思議」という枕がつくことになる。なぜだろうか。お話を聞いた釜石市民自身の明るさもある。困難に立ち向かう積極的な姿勢もある。難問だ…とうつぶしてしまわずに、とりあえず今立っている足もとから、多様な仕方を取り組んでいく現実的な実行力ということもあるだろう。それらを見聞きしていると気持ち明るくなってくる。人間社会、まだまだ大丈夫、という気持ちになる。こうした明るさが根つこのところで釜石の「希望」を支えているのだろうと思っている。



東京大学社会科学研究所  
希望学プロジェクト特別寄稿